

# 『魔女の宅急便』における支援のありかたに 関する心理臨床学的探求の試み ——「不如意」との出会いという視点から——

小 山 智 朗

## 要 約

本論の目的は、アニメーション映画『魔女の宅急便』（スタジオジブリ制作・東宝配給）を題材に、13歳の見習い魔女・キキの心の成長と、周囲の支援のありかたについて心理臨床学的な視点から検討をおこなうことである。本論では、「不如意」との出会いという観点からキキの変化を読み取っていく。その作業を通して苦悩する多くの思春期の子どもたちを支援する際の道標としたい。

キキは修行先の街で、故郷の村では体験したことのない、数々の思い通りにならない現実には落ち込み、内なるネガティブな感情に振り回され、挙句は魔法の力まで喪失してしまう。その意味で、キキはいわば先鋭化した形で「不如意」を生きたと考える。本論ではキキがこうした危機をいかに乗り越え、周囲はどう支援したのかを考えていく。

## 1. はじめに

### 1) 「宮崎さんもそろそろ終わりだね」との声

『魔女の宅急便』は、1989年に公開されたスタジオジブリ(以下ジブリ)の第4作目のアニメーション作品である。角野栄子の同名の児童文学作品を原作としている。映画では、主人公の13歳の魔女・キキが、修行の旅を通じて、様々な経験を積んで大きく成長する様が描き出される。

実はこの『魔女の宅急便』の公開前まで、ジブリの興行成績は右肩下がりの状況だった。そのため、今となっては信じがたいが、「宮崎さんもそ

ろそろ終わりだね」という辛辣な意見もあった(鈴木, 2013)。そんな宮崎監督がジブリの命運を託したのが、13歳の見習い魔女・キキだったのである。キキは、そんな大人たちからの重い荷物を預けられるも、軽やかにその職務を果たす。当時の日本アニメーション映画の興行収入を更新し、見事ジブリの人気を上昇気流に乗せたのである。キキが危機を救ったのは、ボーイフレンドのトンボだけではなくジブリでもあったわけだ。

本論の目的は、キキがいかに成長し、その成長を周囲がいかに支えたかについて心理臨床学的に検討することにある。まず、視聴したことがないという読者のためにあらすじを紹介しておく。

## 2) あらすじ

主人公のキキは13歳。魔女と人間の間に生まれた女の子である。13歳になったら修行のため他所の町に移り住み、独り立ちするという魔女のしきたりに従い、満月の夜、相棒の黒猫ジジと共に旅立つ。苦勞の末に、海沿いの大きな街コリコにたどりつき、そこを修業の場所と定める。ただ、故郷の村と違って、コリコの人たちはキキには冷たく感じられる。住む場所も仕事も決まらず途方に暮れていると、パン屋「グーチョキパン店」のおかみ・おソノさんが、居候させてくれることになる。居場所を定めたキキは、空飛ぶ魔法を活かして魔女の宅急便屋を始め、次々と舞い込む仕事をこなしていく。18歳の画家のウルスラ、お客の老婦人、ボーイフレンドのトンボたちとの出会いの中で、また数々の仕事の失敗やトラブル、魔法が使えなくなる危機を乗り越える経験を通して、キキは魔女として、1人の少女として大きく成長を遂げ、街の人にも受け入れられていく。

## 3) 本作の普遍性—いつでもどこでも誰にでもあてはまる物語—

まず、本論で『魔女の宅急便』を取り上げる理由を記す。先回りして結論を言うってしまうなら、本作が普遍性をもつからだ。以下、詳細を検討してみよう。

### (1) 主人公

まず主人公は魔女のキキである。この魔女の物語という設定を聞くだけなら「私には無関係な遠い昔のおとぎの国のお話し」、そんな風に捉える向きもあるだろう。しかし、本作は人間離れした超人的な力を用いる「スーパー魔法使い」の活躍譚ではない。空を飛べるという点ではこれまでの魔女の物語の系譜を継ぐが、キキには超人的な特殊能力があるわけではない。それどころか、居場所が持てずに途方に暮れ、同世代の女の子と比較して落ち込み、時に嫉妬し、数え切れないほどの失敗をしでかす。挙句は魔法の力が薄れる不安に怯える。そんな実に人間くさい、しかも見習いの魔女である。その魔法もただ空を飛ぶだけであり、それさえ実に危なっかしい。

宮崎もインタビューの中で次のように語っている。

最初の出発点として考えたのは、思春期の女の子の話を作ろうということでした。しかも、それは日本の、僕らのまわりにいるような地方から上京してきて生活しているごくふつうの女性たち。彼女たちに象徴されている、現代の社会で女の子が遭遇するであろう物語を描くんだ、と。

(角野栄子・宮崎駿(2001) ロマンアルバム魔女の宅急便、徳間書店)

川勝(2014)は、魔法についてあくまで「誰でもが持つ潜在的な『才能』の象徴と捉え、普遍化している」と述べている。このように、本作は「普通」の少女のありのままの姿が描き出された物語と言える。何より監督の宮崎(1996)自身が、「この映画での魔法とは、等身大の少女たちの誰でもが持っている、何らかの才能を意味する限定された力なのです」としている。

また、抜きん出た才能や視線を釘付けにする美貌の持ち主ではなく、どこにでもいそうな少女を主人公に据えることで、多くの「普通」の人が共

感しやすい設定にしたのではないか。「僕らのまわりにいるような」存在だからこそ、特別の才能を持たない私たち一般人の心を広く打つように思われる。「主人公の自立の過程は若い読者の共感と呼ぶのは確か」(武田, 2004)なのであり、何より興行成績がそれを雄弁に物語る。

## (2) 舞台設定

では、舞台背景はどうだろう。小道具、大道具を仔細に見るなら、電車や車、飛行船、白黒テレビ、テレビレポーターのマイクやカメラ、家具(キッチンオープンなど)は、半世紀前の代物にも見える。しかし、一貫した画面の明るさや暖色を多用した色遣い、石組みの街並、服装(キキの真っ黒な服装はもちろん、街行く人々の服装)からも時代性は巧みに排除されており、特定の時代を彷彿させることはない。それこそ、現代の話と言っても違和感はない。また、場所も「日本の女の子たちがなんとなく思い描いているヨーロッパ」(鈴木, 2013)という設定であり、確かに北欧風の町ではあるものの、特定の場所と紐づけられてはいない。このように、巧みに時代や場所の限定を避け、「いつでも、どこにでもある街」として印象付けることに成功している。

このように、時代や場所に余計な色付けをせず、いわば「白紙」のキャンバスにすることで、時代性や場所性を超え思春期の少女が成長していく、普遍的な物語を描き出すことが試みられたのではないか。そして、その仕掛けは見事奏功した、そう筆者は考えている。川勝(2014)も「魔女の宅急便」を称して「観客一人一人が自分に引きつけて映画の内容を生き直したり、考え実践したりすることが出来るような、現実的行為を喚起する等身大の主人公の物語」と述べており、筆者の見解と一致する。

それゆえ、この作品を検討することは、単に1人の少女の成長を考えるだけでなく、思春期にある多くの子どもたちの成長を考えることにつながるだろう。

### (3) 「不如意」という視点

本作は様々な視点で検討することが可能だが、本論では「不如意」(清水, 2009)との出会いという観点から、キキの変化を読み取っていく。

この「不如意」とは、清水(2009)が、病を抱えて生きるクライアントの主体のありかたについて考察する中で提示した概念である。清水によれば、「自らの意図や意志とは無関係に置かれてしまった状態・状況・外部から規定されてしまった属性のうち、それを生きていくことに困難さを覚え、変えたいと願いつつも、主体の力ではそれ自体を変えられないと感じられる状態、状況、属性」とされる。平たく言えば、「自分の力ではどうしようもない現実」と言える。これは、病を抱えるクライアントにだけ当てはまるのではない。我々が生きること自体、寿命や能力の限界、数多の制限といった「不如意」の中で生きることであり、誰もが「不如意」を抱えつつ生きていけると言える。その意味で、「不如意」とは思春期に留まらず誰にとっても普遍的なテーマと言えらる。

キキは修行の旅の中で、数々の思い通りにならない現実に出くわし、拳句は魔法の力まで喪失してしまう。キキは、いわば先鋭化した形で「不如意」を生きたわけである。その意味で、キキがいかに「不如意」を経験し、周囲はいかに支えたかを考えることは、単に1作品の解題に留まらない。ここまで検討してきたように作品自体にも、そして「不如意」というテーマ自体にも普遍的な意味があると考えられる。

それではここから、物語に分け入っていこう。

## 2. 両親の支援—無条件の「甘さ」—

### 1) 母親の関わり

冒頭でカメラが大写しにするのは、草原に寝転がる少女である。早くも彼女がヒロインであることが明らかにされる。

青空の下、草原を吹き渡る風。少女はラジオの天気予報を聞いているら

しい。淡いパステルピンクのワンピース、髪には大きな赤いリボン。彼女の目は何を見ているのだろうか。年代は思春期頃か、表情は憂いを含んで映り、幾分大人びた雰囲気をもとう。

しかし早くも第一声で、このイメージは脆くも音を立てて崩れる。さっきの物憂げにも映った様子はどこへやら、勢いよく家に駆けこみ、屈託のない大声で母親に宣言するのだ。こんな風に。

「今夜に決めたわ 出発よ！」

「お母さーん！お母さん 天気予報 聞いた？今夜 晴れるって！満月だって！」

ここからキキは修業の旅立ちを、ついさっきの天気予報で決めたことが分かる。もちろん快晴で、満月の夜というのが決め手になったのだろう。しかし、様々な条件を吟味して計画を立てた様子はまるでなく、いかにも短慮である。そもそも天気予報で人生の一大事を決めること自体が、彼女の「お天気屋」ぶりを物語る。

さて、キキの言葉を聞いた母親は、慌てた様子でこう応じる。

「キキ、あなたまたお父さんのラジオ持ち出したの？」

ここで、旅立ち自体ではなくラジオの持ち出しに言及する辺りが、出し抜けの「旅立ち宣言」への戸惑いや慌てぶりを却って余すところなく伝えている。母親から「また」と叱られているところからは、何度か注意されても、その度に勝手に持ち出しているのだろう。が、キキは悪びれる様子は全く見られない。また、詫びる素振りさえない。

ここまでたった二言の会話だが、勘の鋭い視聴者には、早くも親子の関係性が見えてくるのではないか。つまり、キキは両親とは「ある程度のワガママは許してもらえる」という関係にあることを。また叱られても悪びれず、また思い付きを主張できることも考え合わせるなら、両親への確たる安心感が培われていることを。

「ねえ、いいでしょう」

「私 決めたの 今夜にするわね！！」

この言葉は、先の推論の妥当性を保証する。自分の意志が叶えられるのは当然で、拒否されることは想像さえしていない、そんな両親への甘えと信頼がある。また、旅立ちにあたって母親との分離不安は全く感じられない。そこから愛着の基盤が形作られていることが窺える。

畳みかけるようなキキの勢いに押され、母親はこう言うのがやっとなる。

「だってあなた、夕べはひと月延ばすって」

ここでも母親は、非難したり叱りつけたりはせず、「だって」と反論するのが精一杯である。キキの意志の強さと、それを許してきた母親のこれまでの関係性が垣間見える。

さらに次の言葉で、キキの勢いや希望を主張する力の強さ(それは別名「ワガママ」とも言う)は視聴者にはっきり印象付けられる。

「次の満月が晴れるか分からないもの。私 晴れの日に出発したいの」

そう、私の願いは絶対なのだ！意志の明確さ、さらに「私が望めば願いは叶う」「世界は自分の意のままになる」といった万能感が感じられる。そして、自らの意志を存分にぶつけられる母親への揺るぎない安心感も。

ここまでの母親とのやり取りから見えてきたキキの状態を一旦まとめよう。キキは気分屋で身勝手な面はあるが、母親への基本的な信頼感は磐石で、また主体的に生き方を決め、果敢に自立に向かうエネルギーに満ちているのだ。

その後、訪れた客のおばあさんとの会話の中で、母親自身も魔女であること、そして昔この村に修行の旅でやってきて、そのままこの村に根を下ろしたことが明かされる。

ここまで見てきたように、母親はどっしりと構えた人間離れした特殊な能力をもつ「偉大な魔女」ではない。気まぐれで自分本位な一人娘に振り回される「普通の母親」役が割り振られているわけだ。娘を案じ、気を揉み、事態に一喜一憂しては、商売道具の魔力も揺らいでしまう、そんな役回りが。といっても無暗に甘やかすわけでも、躰ができないほど弱いわけでもない。キキの身勝手さに注意は与えている。ただ、それは言語道断に断罪するような質のものではない。その表情や口調からは、娘への愛情に裏打ちされた、あくまで躰の一還であることが自然と伝わってくる類のものだ。親子のやり取りからは娘の希望や思いを受けとめ、認め、尊重してきたことが、そして何より愛情深く育ててきたことが透けて見える。

それでは父親はどうだろうか。

## 2) 父親の関わり

「案の定」である。キキは父親にも何の躊躇いもなくこう高らかに告げる。

「お父さーん！私 今夜 発つことにしたの」「さっき 決めたの」

やはりそうだ。キキは人生の一大事を「さっき」思い付きで決めたのだ。そして、既に決断の実行は決定事項と化している。「世界は自分の意のまま」、そう信じて一点の疑いも感じられない。この移り気なプリンセスに、父親もこう言うのが関の山である。

「だってほら、来週キャンプ道具を借りて来たのに…」

「ごめんなさーい」

おそらく準備に奔走したであろう。そんなキャンプの予定をいきなり反故にされても、父親は驚きこそすれ怒ったり、声を荒げる様子はまるでない。母親と同様、「だって」と既に決まった流れに違和感を口にするだけである。

このように、父親は母親に輪をかけて心優しき人であることが見えてきた。風貌も身に纏う雰囲気も、『となりのトトロ』のサツキとメイのお父さんを彷彿とさせ、優しさを絵に描いたような人物である。1人娘が可愛くて仕方なく、ワガママにもいそいそ喜んで振り回される、そんな甘い父親ぶりが印象づけられる。

一方のキキは、確かに口では詫びてはいるものの、そこに深い反省の色はない。全くあっけらかんとした口調である。自分のために準備に奔走してくれた父親に配慮したり、感謝を伝える様子は一切ない。自分の願いは何でも叶い、少し謝れば全てが許される、万事が意のままになる世界の住民なのである。

その後の会話で、父子の関係性がさらに浮かび上がってくる。

「お父さん！ あのラジオちょうだ〜い！ねーラジオはいいんでしょう？」

「はっはっはっは！とーとう取られたなあ！」

キキは屈託なく、また遠慮なく父親におねだりするのだ。おそらくキキは、笑顔ひとつで望むものは全て手に入れてきたのだろう、このラジオのように。父親も取りあげられてどこか嬉しそうでさえある。目の中に入れても痛くない、そんな1人娘への溺愛ぶりはなおも続く。

「どれ…私の小さな魔女を見せておくれ」

「おとーさん！！ねえ 高い高いして！！小さい時みたいに」

「よーし…ンッ！ハハハ… いつの間にこんなに大きくなっちゃったんだろう」「上手くいかなかったら帰ってきていいんだよ。」

「そんな事になりませんよーだ」

キキは、小さな女の子のように、少しばかり甘えた口調で「高い高い」をねだるのだ。そして父親も当然のように応じる。ここには仲睦まじい親娘の交流がある。「小さい時みたいに」という言葉からは、今でも記憶に残っているほどよく遊んでもらっていたのだろう。父親の子煩悩ぶりが窺

える。

しかし、である。筆者にはやはり違和感が残るのだ。果たしてこれは思春期の父子関係と言えるのか。もちろん、別離を前にして最後に特別にスキンシップを求めた、という儀式めいた意図はあっただろう。しかし、それを考慮に入れても、まだその関係性は児童期の父娘のそれである。田村(2014)も、この「高い高い」の中から「スカートから下着が見えるのも気にしない。こうした態度から、父親を異性として捉える意識がキキには薄いことが伺える」と看取している。キキの様子からは反抗期の芽も感じ取れないし、父親を毛嫌いする様子はみじんもない。全くない。口をとがらせて、やや演技調に拗ねたところからも、却って父親への甘えっぷりは強く印象づけられる。

また父親も甘い。実に甘い。思春期の娘を抱きしめて自立の足を阻むセリフを口にするのだ。「帰ってきていいんだよ」。ただ、百歩譲れば13歳の少女との別離であり、領けないこともないのだが――。

そして突然の送別会の開催。その裏で父親は方々で頭を下げ、参加の依頼に駆けずり回ったのだらう。当日の依頼にもかかわらず、庭を埋め尽くすほど大勢の人が駆けつけてくれる。この一家が、いかに街の人たちに愛されているかがよく分かるシーンである。

ここまでを振り返ろう。父母にも、そして家族の延長のような村の人にも共通するのは、キキの思いを最優先し無条件に愛を注いでくれたことである。キキは、両親の、そしてこの小さな村の愛情にどっぷり包まれて育ったのだ。ただ、キキはそんな周囲の心配りや善意にまるで気付いていない。ましてや感謝する場面は1度もない。

### 3) 父母の退場

実は、父母の登場シーンは冒頭の数分にも満たない。すぐに表舞台から舞台袖へと退いてしまう。そして物語のエピローグまで、もう舞台上がることはない。キキの成長にとって、こうした両親の庇護的なありかたは

もうお役御免なのだ。

現実の親子関係では「危ないから」「まだ早い」など理由を付けて、自立への歩みを阻むことは多い。しかしキキの両親は一抹の淋しさを漂わせつつも、自らの出番が終わると潔く舞台を降りていくのだ。

では、両親の関わりは無に帰するのか？いや、とんでもない。この2人の関わりの蓄積は、後述するようにキキの中に確かに息づき、内在し続ける。それを象徴的に表しているのは、ラジオとほうきであろう。父親からもらったラジオは、いつもキキのそばにある。世の中の出来事を知らせ、世界や他者とつながるために、孤独の淋しさを埋めるために。そして母親からのほうきは、魔女にとって最も大切な道具としてキキを支え続ける。両親は、物理的には離れたけれど、心理的には確かにいつもそばに「いる」のだ。

ここで、冒頭シーンから浮かび上がったキキのありようをまとめてみよう。

### 3. 旅立ち前のキキ

#### 1) 万能的な世界観—小さい頃は神様がいた—

出発前のキキには「他者」は存在しなかったと考えられる。「何を言っているの?」「他者なら父も母も友達もいたじゃないか」。そう思われるのはもっともである。確かに、キキの周りには他者はいた。ただ、本論では他者と「他者」を分けて考えている。「他者」は単に自分以外の人を表す他者ではない。主体性を持ち自らの意志を持った、自分とは異質で他者性を帯びた存在を指す。そんな「他者」はキキには存在しなかったのだ。もう少し説明を加えよう。

幸福な赤ちゃんは、自分の思いを主張することで、もしくは主張しなくても願いは叶えられる。ミルクが欲しければ、願いさえすれば、時に願わなくてもアブラカタブラ、あら不思議。誰かが魔法のようにミルクを準備

してくれる。そうした環境下では、願いさえすれば叶うという万能な世界観が守られ、おそらく「不如意」に直面することもない。そんな風に相手が自分の手足のように思い通りに動いてくれる時、相手との隔たりや距離を感じることはない。その気持ちを慮ったり、配慮することもないだろう。私たちが誰も自分の手足の動きに注意を払わず、ましてや手足に感謝もしないように。そこには「他者」はいない。

キキも、いまだそうしたありがたさを引きずっていたように思われる。キキは、ワガママぶりを遺憾なく発揮し、映画の冒頭で描かれた範囲ではその全てが叶えられていた。その意味で、できないことや自分の限界を意識することは少なかったのではないか。また他者の思いを斟酌したり、思いやることも見られなかった。別の喩えを用いるなら、キキは天動説的な世界観にいたのだ。自分が世界の中心で他者は周回する衛星さながら、自分の都合に合わせてくれるのが当然の世界観である。他者は人格を持った存在ではなく、自分に合わせて動くだけの存在としてある。キキにはやはり他者性を帯びた「他者」はいなかったのだ。

冒頭シーンが、特別な状況の切り取りではなく、キキの状況を象徴的に表していると見るなら、キキが望めば、周囲のお膳立てで殆どのが叶えてもらえていたのだ。

ユーミンは主題歌でこんな風に歌う。

小さい頃は神様がいて不思議に夢をかなえてくれた

キキ自身がウルスラとの会話の中で述べるように、魔法(ホウキで飛び、ジジと会話できること)も特に努力しなくても、「何も考えなくても」当たり前のように使えていた。私たちがいつ歩けるようになったか忘れ、特に何も考えずとも歩けるように、キキにとっても魔法は当たり前で、いわば身体の機能のようなものだった。こうした意味で現実も他者性を帯びた「他者」ではなかったと言えるだろう。

さらに、思いのままに生きているため内なる思いは自明であり、また満ち足りている状況にいるため、ネガティブな思いにとられることもない。内田(2013)はこう述べる。「子どものときは自分の心と体は完全に調和しています。自分が自分であることは100%自明のことでした。自分の欲望は100%純粋な欲望であり、身体と心はぴったり一致して、何の隙間もなかった」。キキも自分の思いに違和を感じることはなく、「身体と心はぴったり一致」していたのではないか。

このように、キキは外的な次元(他者や現実)でも、内的な次元(内なる感情)でも、「不如意」を感じることなく、思い通りになる世界に住んでいたのだ。

## 2) 「発達上大へん重要」なこと

ここまで、キキの自分本位のワガママさを幾分批判的に描いてきた。キキの様子は、随分と井の中のワガママ蛙であるように思われる。他者への配慮に乏しく、身勝手である。父親に高い高いをねだるとは、まだ思春期的な心性に達していない。そうした指摘は全く妥当なものである。

しかし、心ゆくまで自分本位に生き、それを受けとめられ、叶えてもらえる体験は子どもにとって不可欠でもある。斎藤(1984)は、以下のような含蓄に富んだ言葉を遺している。

子どもは、客観的に無力な絶対依存者であるにもかかわらず、親の欲求処理代行によって、欲求実現不能の壁がまるで不在であるかのような、万能感の世界に身を置くことになり、“強さ”や“確かさ”、そして“楽観性”の感覚を根づかせると言われる。そして、以後の発達は、これを土壌にしてこそ自力が培われ、自力を基に万能感からの脱却を果たすという形に進むとされる。したがって、逆説的ながら、早期の万能的体験や野放図な自己表出(主張)は発達上大へん重要であり  
…(略)

家庭の守りに包まれ、主体性(わがまま性)を存分に発揮し、それを受容してもらう体験は、子どもにとって「発達上大へん重要」である。こうした幸福な体験を満喫することで、自分が何を欲しているかは明確となる。また「自分は何でもできる」という感覚を味わい、自己肯定感の基盤が育まれる。さらに人生は良きもので、周囲は自分を支えてくれるという楽観性や運命への楽天的・肯定的な見方までが培われる。

キキも、両親に愛されて育ってきたことによるものだろう。明るさや屈託のなさは一点の曇りもなく、微笑ましくすらある。また、これだけ、自分の思いを気兼ねなく自由に言え、言いつけを多少守らなくても気にしないところは、親の意に添う「良い子」ではなくても、愛されることに一切の疑いがないことを示す。親への絶対的な安心感がある。

それゆえ親から旅立つことにも不安はない。それどころか、遊園地の開園を待ちわびる子どもが、ゲートが開くと同時に駆け出していくような高揚感に満ちている。キキは「何でもできる」「世界は安心だ」という感覚を、存分満喫できる幸せな子ども時代を送ったのだ。それを十分に満喫したからこそ、他者への安心感や多少の困難が起きても自分の力で乗り越えられるという自信や楽観的な人生観が育まれたのだ。そして、まだ見ぬ世界へ飛び出すことができたのだ。『千と千尋の神隠し』の冒頭シーンの、千尋の投げやりな態度や、無気力・無関心・無感動な様子とを比べてみれば、その差は歴然である。

もちろんキキは明確には意識していないだろうが、「高い高い」を望んだ背景に、旅立ちへの不安や会えない淋しさもあったかもしれない。しかし私たち心理療法家は、自立に向かうときは親にベタベタと甘えることがあることを知っている。単なる後退ではなく、前進のための後退である。ジャンプするとき助走のために一旦下がるように。

#### 4. キキには何が欠けていたのか

大塚(2013)は、物語の基本構造として次のように述べた。

そもそも物語の文法の一の基本は二つある、と考えて下さい。

一つは「欠落したものが回復する」というパターン。もう一つは「行って帰る」というパターンです。(中略)主人公はマイナスの状態つまり「欠如」からスタートしてプラス状態、すなわち「欠如の解消」に向かう (大塚英志(2013)ストーリーメーカー、星海社)

このように大塚は、物語の「文法」として「欠如を埋める」という基本構造があることを看取する。それでは、キキにはどんな欠如があったのだろうか。

1つめは、全て満ち足りており、逆説的に満ち足りているがゆえの欠如があったと考える。「不如意」のなさである。

2つめは、現実裏付けられた自信のなさである。キキは確かに自信に満ちていた。ただこれは、狭い世界で、しかも周囲に下駄を履かせてもらったもので、現実の世界で裏打ちされたものではない。山岸(2021)が述べるように、「閉鎖的な空間の中で十分な愛と肯定を受けて育ったキキには、十分な自己肯定感はあるが、その肯定に対する根拠はない」わけである。いわばキキは大海を知らない子ガエルだったのだ。

それでは、「不如意」はいかに立ち現れ、キキはいかに向きあい、真の自信をつけていくのだろうか。

## 5. 「不如意」との邂逅(その1)

### 1) 旅立ち

送別会での友人とのやりとりは印象的である。

「どんな町にするの?」「大きな町?」

「うん。海の見えるところ探すつもり」

すました顔だが、得意げな様子は隠せない。友人からは「うらやましいなあ」と声上がる。それに対しては、重々しく、若干のヒロイックさを醸し出しつつこう告げる。

「私 修行に行くのよ?よその町で一年 がんばらないと魔女になれないんだから」

この鼻高々な表情を見よ! 「物見遊山の遊びではなく、重大なミッションなのだ」「選ばれし特別な存在なのだ」という強烈な自負。

そして祝福と歓声の中、気取ってヒロイン然と飛び立っていくのだ。ただし、そこは流石のジブリ。先行きを暗示するように、あちこちにぶつかりながら。

それでは、我々もキキの修業の旅に付いていこう。

### 2) コリコの街へ

浮き立つ明るい曲調の『ルージュの伝言』に乗せられるように、キキは風を捕まえ飛行は軽やかである。しかし、旅立ちの興奮も冷めやらぬうちに、早速様々な「不如意」に出くわしていく。

まず、飛行中に会った先輩魔女は、イヤミで取り付く島もない。周囲にチャホヤされ、持ちあげられてきたこれまでとはまる逆。目一杯愛想よく振舞っても歯牙にもかけられない。また特技を聞かれても、何一つ答

えられない。「自分を取るに足らない存在である」という現実を突きつけられるわけだ。現実からの軽いジャブに、早くも高い鼻を捻挫しかけてしまう。そのせいだろうか。『ルージュの伝言』も、フェードアウトしてしまう。

しかも快晴だったはずの天気予報は大いに外れ、嵐にまで打たれてしまう。ほうほうの体で潜り込んだ自動車では、「おまえの居場所ではない」と家畜にまで厄介払いされる始末。意のままにならない現実の連続。

それでも、やっとの思いでコリコの街に降り立つ。むろんいくらキキでも、歓呼の声に迎ええられることまでは期待していなかっただろう。ただ、それにしても、だ。何一つ思い通りにならないことまでは、想定の外だったのではないか。とびきりの笑顔を作って挨拶しても怪訝な顔をされ、さらに警察に職務質問までされる始末。ホテルも身分証明書がないことで門前払い。今夜寝る場所さえ見つからない。キキはこれまで自分が包まれていた世界や人々から、剥き出しで放り出されたのだ。

途方に暮れるキキ。天衣無縫で(根拠なき)自信たっぷりといった様子は見る影もなくなり、不安で色を失っていく。家族や村の人々に守られて安穩と暮らしてきた少女は、現実と直面するとこんなにもあっけなく立ち行かなくなってしまうのである。他者は無条件に自分を受け入れてくれる存在でも、意志のない衛星でもなく、それぞれが意志や考えを持っていることを思い知らされていく。街の人々との距離や隔たりは強烈に意識され、現実とは全く意のままにならない。「他者」と出会ったのだ。

オソノさんに会うのはそんな時だ。オソノさんから助け舟を出してもらい、居場所と自分にでもできる仕事をもらう。こうした街での体験を経たからこそ、その思いやりは沁みただろう。キキが感謝をしっかりと表現したのは、これが初めてである。他者を自分の手足ではなく、1人の人として「他者」として遇した表れであろう。

### 3) 宅急便屋の店開き

キキは自分が唯一できる飛行能力を生かして、宅急便屋を開業する。これは自分が万能ではなく、「飛ぶことしかできない」という自己の有限性を自覚し、しかしそれを引き受けて生きようとするのだ。大谷翔平に憧れていた野球少年が、投手を諦め、4番バッターを諦め、唯一残されたバントの能力を生きる道とするように。

ただ、不如意は続く。ほっとしたのも束の間、配達中カラスに襲われ荷物を落としてなくしてしまう。いくら頑張っても現実はいかに思えない。現実には自分の努力や、もちろん笑顔1つでは如何ともしようがない。

ただそうした中でも、ジジや配達先の犬は窮地を救ってくれる。それぞれが自らの意志や考えを持って行動する「他者」であることが分かってくると、自分に向けられた厚意は決して当たり前なものではないことを知る。それゆえ、その有難みに感じ入るところもあったのではないかな。

### 4) 「あたしこのパイ嫌いなよね」—孫娘との出会い—

その後も、キキは宅急便の仕事に奮闘努力していく。そんなある日のこと。孫娘にパイを届けて欲しいという老婦人の依頼があった。婦人は、孫娘のパーティーのためにニシンとカボチャのパイを届けたかったが、オーブンが壊れていて焼くことができずにいる。キキはトンボに招待されたパーティーの予定が迫っていたものの、料理を手伝うことに決める。苦労しながら完成にこぎつけ、孫娘の家に向かって飛び立つ。しかし折しも激しい雨。ずぶ濡れになりながら、やっとの思いで孫娘の家に着くのだ。孫娘はキキと同年代だろうか。濡れ鼠の黒い服のキキに対し、華やかな服に身を包む少女。奥ではパーティーの嬌声も聞こえてくる。

女の子はパイを受け取るとキキへの感謝の思いどころか、こう言い捨てるのだ。

「おばあちゃんからまたニシンのパイが届いたの。あたしこのパイ嫌いな

のよね」

そう言うが早いかな、キキの鼻先でドアを閉めてしまう。それにひどいショックを受けるキキ。部屋に帰るとパーティーにも行かず、布団にくるまって寝込んでしまう。

この場面について、宮崎は次のように語っている。

老婦人のパイを届けたときに、女の子から冷たくあしらわれてしまうんですけど、宅急便の仕事をするというのは、ああいう目にあうことなんです。特にひどい目にあったわけじゃあなくてね、ああいうことを経験するのが仕事なんです。

僕はそう思いますし、キキはあそこで自分の甘さを思い知らされたんです。当然、感謝してくれるだろうと思いつんでいたのが……違うんですよ。お金をもらったから運ばなきゃいけないんです。もし、そこでいい人に出会えたなら、それは幸せなことだと思わなくちゃ……。別に映画ではそこまでは言うてませんがね（笑）。

それはあの場合、キキにとってはショッキングですごくダメージになることかもしれないけど、そうやって呑み下していかなければいけないことも、この世の中にはいっぱいあるわけですから。

（宮崎駿（1996）出発点、徳間書店、512-513）

そう。孫娘は何も悪くない。ただ自分の気持ちに正直なだけである。キキや老婦人の思い入れや苦労は、あくまで「こちらの事情」に過ぎない。孫娘には孫娘の事情があったはずである。「嫌いなので送ってこないで」、そう伝えているのにまた送ってきたのだ。迷惑千万！

キキはここで痛い程思い知ったのだ。「努力すれば必ず思いは通じる」ほど現実には甘くはないことを。いくら努力しても、いくら誠意を見せても、それはあくまで「こちらの事情」であり、それで誰もが喜んでくれるのではないことを。現実や他者は自分の思い通りにならないことを。キキは、

現実と他者の他者性に打ち付けられたのだ。ただ、我々はそうした現実の不条理(本論で言う「不如意」)を受けとめて、宮崎の言うように「呑み下して」いかねばならないのだ。

ただキキが楽しみにしていたパーティーを断り、寝込むほど落ち込んだのは、それだけが理由ではないと思われる。では他に何があるのか。

孫娘は自分の気持ちに正直なのは良いとして、おばあさんやキキの心遣いや思いを汲むことはなく、もちろんお詫びや感謝の一言もなかった。そうした態度が人を甚だしく傷つけるのを、キキは身をもって知ったのだ。「…？」そして気付いたはずだ「!」。おそらくキキは写し鏡を見るように、孫娘の態度に自分を見たのだ。いかに自分の態度が、人を傷つけてきたのか。そんな身を苛むような内省を迫られたためではなかったろうか。

もちろん、発熱し寝込んでしまったのは「雨に打たれて冷えたから」というのが合理的な理由だろう。ただ、心理療法を生業とする我々は、精神的なストレスや悩みがあまりに大きく、ここで受けとめられない時に身体化、すなわち身体という症状で出すことを知っている。心理臨床学的に見るなら、心で抱えきれないほどの痛みが身体化した可能性もあったように思われる。

## 5) オソノさんの関わり

街での生活が始まるにあたって、最も大きな役割を果たしたのはオソノさんであろう。

これまで、いつも受け入れられていたキキにとって、歓待でなければ拒否に映ったのだろう。キキはコリコの街では、皆に否定されているとまで思ってしまう。それゆえ、「この街の方は魔女がお好きじゃないみたいです」と弱音を吐くのだ。それに対するオソノさんの返答がふるっている。

「大きな街だからね、いろんな人がいるさ。でも、あたしはあんたが気に入ったよ」

その通り。社会は「いろんな人がいる」。無条件で自分を受け入れてくれるはしないが、一方で受けいれてくれる人もいる、そんな現実を教え、そして「他ならぬ私はあなたを受け入れる」。そう告げたのだ。

彼女は、途方に暮れるキキに居場所ばかりか仕事まで世話をする、いわば「コリコのお母さん」である。「千と千尋の神隠し」で同じ役割を果たしたのは、そう、湯婆々だ。ただ彼女は湯屋という大温泉旅館を切り盛りする凄腕の女将ではあったが、気軽に話しかけるのがはばかられるほど厳しい、試練を与える父性的な存在であった。

一方、オソノさんは女性性のモデルとなる存在で、見守り手として存在する。といっても、オソノさんの関わりは無条件に支援する「甘い」関係からは遠い。基本的にはキキを1人の大人として認め、主体的な考えや行動を求める。オソノさんが寝る場所や電話を提供したのも、あくまで労働の対価であった。つまり、宅配便屋とパン屋という職業人同士の対等な「契約関係」だったのだ。

とは言え、危機に陥った際は必要な支援をそっと差し出す。先述したように、居場所や仕事を提供したことはその象徴であろう。熱を出した時には、うるさく詮索はせず、温かな布団をかけスープを差し出す。また、キキが落ち込んでいる要因の1つがトンボとの関係にあることを察し、茶目っ気たっぷりに導きの糸も垂らす。配達先を告げずにトンボの家に配達を頼むという粋な心遣いで、仲直りのキッカケを与えるのだ。しかしそれでも必要以上に踏み込まず、決して甘さで包んでしまうことはない。この匙加減の絶妙さ。

このように、オソノさんは、基本的には悩みや課題を取ってしまわず、主体的に解決する動きを見守っている。ただ、キキがどうしても自分で解決できない危機に陥った際には、そっと手を差し伸べる。そこにバタバタした甘さはない。常にほんの少しの距離感がある。その証拠に、キキがワガママを言うことは1度もない。また発熱の時にも物言いたげな様子だが、控えて口をつぐむ。

キキは父母の下にいるときは、両親の提供する環境にどっぷりと浸っているだけで、それに無自覚だったと思われる。しかし街に出て、その守りを失った時にはじめて気付いたのだ。「他者」であるにもかかわらず、自分を労わってくれる有難みに。風邪を引いたときに、普段は意識しない健康の有難みが分かるように。それゆえ、深い感謝が生じたのだ。

続いて、ジジの支援について見ていこう。

## 6) ジジの関わり

映画の前半では、ジジの支援は不可欠なものだった。

そこでは、ジジはただのペットという存在に留まらず、様々な役割を果たした。故郷の町を離れて不安な時には、話し相手になるなど友人としての支援を、そして時に行動を諫めマナーを教えるなど親としての支援もしていた。

こうした支援は、心理学的に見るなら移行対象としての働きと理解できるだろう。移行対象とは、英国の精神科医 D.W.Winnicott が提唱した概念で、乳幼児が特別の愛着を寄せ、肌身離さず持つタオル、ぬいぐるみなどを指す。もちろんキキは幼児ではないし、ジジも実際の猫であり、厳密な意味では移行対象には該当しない。ただ、移行対象の本質が、ストレスフルな状況(母親との分離等)で、淋しさを埋め、安心を与え、社会性を育むものであるとするなら、まさにジジは移行対象的な役割を担っていたのだ。

もう1つ、ジジ自体の支援というより、ジジを通じて自己との対話をする意味があったと考えられる。田村(2014)は「ジジの言葉は実はキキ自身が語っていた」としている。プロデューサーの鈴木(2013)も次のように言う。

ただのペットじゃなくて、もうひとりの自分なんですね。だからジジとの会話っていうのは、自分との対話なんです。

私たち心理療法家は、子どもたちがぬいぐるみに自己を投影し、本人も未だ気付かない無意識的な思いを語らせることを知っている。そうした意識しにくい心の声を、ぬいぐるみを介して表現することを通じて、自己の内なる声に気付き、心の中に抱えられるようになっていくのだ。キキも同様のプロセスにあったのではないか。武田(2004)が、キキとジジの会話は、「自分自身の心の中にいるもうひとりの自分との対話を意味し、この対話を繰り返すことにより、キキはものごとを客観視できるようになり、自己の確立が行われる」と述べることも、筆者の見解と重なる。

子どもにとってぬいぐるみは、ただの綿を詰め込んで動物の形に成形した物体ではない。我々は小さな子どもたちがいかにぬいぐるみを大切に、小さな兄弟のようにどこへ行くときも大切に連れ歩くことを知っている。いかに熱心にぬいぐるみに心の声を代弁させ、「会話」をしているのも知っている。その時、彼(彼女)は親友であり、家族であり、そして自分でもあるのだ。キキにとっても、ジジは友人であり、父母であり、自分の気持ちや心に潜む内言を代弁してくれる存在であった。その意味で、ジジは多層的な支援をしたと言える。

## 7) 自己意識の登場

思春期に入ると、とりわけ女子は鏡を繰り返し眺めては容姿を確認することが増える。他者から自己に向けられる視線に対する意識が高まり、「自分が周囲の目にどう映るか」は一大事となる。それは容姿だけではない。成績、才能、人となりなどが他者の目にいかに映り、どう評価されるかは重大な関心事である。キキも同世代の華やかな女子たちの姿を見て、自分の装いを見つめるシーンが描かれている。しかし、それは純粹に他者の視線を気にするというより、他者を鏡として、反省的に自己を見るありかた、言い換えれば他人の視線を媒介とした反省意識が兆していると捉えた方が正確であろう。

自己意識が高まったのは、こうした発達の要因に加えて、キキの場合は

環境の変化という要因も大きい。おそらく、故郷の狭い村では誰もが顔見知りで、自分が自分であることは自明で、わざわざ自己を証明・紹介する必要もなかったと思われる。しかしこの街に降り立った日に、身分証明書がないためにホテルの宿泊を断られたことを思い出そう。街ではキキのことを知る人は誰一人おらず、それまで自明だった私という存在を、改めて問い直さざるを得ない。田村(2014)の述べるように、他者からの認知が保証された環境にいるなら「自ら自己を主張する必要、自分はどのような人間であるかを明確に捉えて他者に説明する必要はない」わけである。また山岸(2021)も「自分が受け入れられない」という経験をすることで、「何もなくても周りが自分のことをわかってくれた今までと異なり、自分で自分を相手にわかってもらわなくてはいけないという必要性を自覚させる」と指摘する。

そして、こうした自己を見つめる動きの登場によって、より切実な「不如意」との出会いがセッティングされる。

## 6. 「不如意」との邂逅(その2)

### 1) 内なる他者性との出会い

キキは、オソノさんの粋な計らいでトンボと再開する。自転車の後ろに乗せてもらったり彼の夢を聞くうちに、徐々に彼に好意を感じ始める。

しかし、トンボの友人の女子たちが現れるとキキの態度は一変する。トンボの楽しげな様子を見ると、途端につむじを曲げてつんけんしてしまうのだ。

下宿に帰ってきてベッドに倒れこみながらこう呟く。

「ジジ、私ってどうかしてる？せっかく友達ができたのに、急に憎らしくなっちゃう。素直で明るいキキはどこかへ行っちゃったみたい」

恋心は、相手への独占欲を掻き立てる。思いを寄せる相手が他の人にな

びくと、好きなのは相手の相手まで恨み憎んでしまう。キキも、嫉妬や憎しみなど、これまで体験したことがない否定的な感情がわき上がったのだ。

またそこには、疎外感や劣等感、おまけに屈辱感もあっただろう。日の当たる場所にいる女の子たちのキラキラした華やかさ、明るい嬌声。それに引き換え、地味で黒い服。(本当はコスモス色の服を着たかったのだ)。村では話題の中心にいた自分が、哀れな存在として同情を向けられている、そんな自己意識は耐えがたかったのではないだろうか。

きっとそうだ。キキは、これまで経験したことの無い激しい不穏な気持ちがあることに気付いたのだ。いや、正確には気付いていない。その突き上げにひたすら戸惑っていた、そう言えるかもしれない。内なる感情という「不如意」との出会い。宮崎(2001)が、思春期の「自分でも自分をコントロールできないみたいな」想いを入れて作る意図があったと語ったのは、このシーンに表わされていよう。彼女はもう「素直で明るい」だけの少女ではいられなくなったのだ。

そして魔法の力は弱まる。ジジと話せなくなり、ほうきで空を飛ぶこともできなくなる。キキの母が、娘を心配して気もそぞろな時に、魔法の力がうまくコントロールできなかったことは伏線となる。魔法は心の状態に左右されるのだ。ここでも、キキのころの不調と魔法は同期する。内田(2013)が、飛ぶ能力の喪失は「コントロールできない『嫉妬』というはじめて経験する感情のせいです。自分では制御できない感情のために彼女は唯一の社会的能力を失ってしまう」と述べたのも、この見解を裏付けよう。

## 2) 魔法の他者性との出会い

そしてこの事態は「魔法が使えない」という「不如意」である。キキはこれまで自分の手足を使うようにほうきに乘って飛んでいた。キキにとって飛ぶことは、「子どもが二足歩行を習得するように自然なこと」(内田, 2013)だったのだ。それが突如としてできなくなってしまう。

これまでキキが魔法について深く考えるシーンは描かれていなかった。「キキにとっての『飛ぶ能力』は天賦の才能でした。努力せずに、飛べた」(内田, 2013)からである。魔法の力は自明であり、半ば無自覚的に使っていたと思われる。そして、ジジと喋れたのは、もっと当たり前で自然なことで、改めて考えることもなかったと思われる。ここで思い通りにならないハウキやジジは、キキにとって「異なるもの」、いわば「他者」として現れたのではないか。

この事態は単に魔法を喪失しただけでは留まらない。この大きな町でちっぽけな自分の存在を証明できる、唯一残された魔法の力を喪失してしまったのだ。北村(2018)は、「飛べるということは大きなアイデンティティであるはずだ。しかし、その大きなアイデンティティは一時的に失われてしまった」とする。心配したオソノに「顔が真っ青よ」と心配され、キキが「魔法がなくなったら何の取り柄もなくなっちゃう」と答えたのも当然だろう。

しかも実際的な問題もある。飛べなくなると仕事や居場所の喪失に直結するのだ。

### 3) 魔法はなぜ弱まったのか

ここで、ハウキで飛べない、ジジと話せないという事態が「なぜ」生じたのかは、先述したように心の不調と連動して「魔法の力が薄れた」ためであろう。ただ、それが「何のために」キキの身に生じたのか目的論的に考えることにも意味があると思われる。

ハウキは母親からもらったもので、いわば母親の守りの象徴である。そこから北村(2018)は、飛ぶ力を失って母親譲りのハウキも折れてしまったことは、「初めて『母親からの庇護』からの卒業の第一歩に立った」と看取している。山岸(2021)も、「故郷への依存が強制的に断ち切られ、キキはいよいよ本格的に自立する・自立せざるを得ない前段階に来たということ」と述べる。ジジは移行対象的な存在であり、父母の代わりに務めてい

ることは既に伝えた通りである。

こう考えてくると、この2つの魔法の力の減退は能力の退化ではなく、成長の結果とも考えられるのではないか。父母が冒頭シーンでお払い箱になったように、ハウキやジジもここでお役御免となったのだ。子どもが成長してぬいぐるみがいなくても、親から離れられるように。そしてぬいぐるみを介さなくても、自分の心の中で対話できるようになるように。つまり、父母の支援に頼らず完全に独力でやることを要請される段階に達したと捉えられるのだ。鈴木(2013)が「ラストで、ジジとしゃべれなくなるというのは、分身がもういらなくなった、コリコの町でちゃんとやっていけるようになりました、という意味を持っているわけです」と述べていることも、こうした見解を裏付ける。このように魔法の力が弱まったのは、完全な独り立ちを準備するためだったとも考えられるのである。

しかし、それはキキにとってはまだ手に余る課題である。途方に暮れていると、ウルスラに自宅へと誘われるのだ。

ここまでは、思春期に至るまでの子どもへの支援、そして思春期の子どもへの間接的な支援については検討してきた。それでは次に悩みに直面した思春期の子どもへの直接的な支援はどのようにすれば良いのかを、心理臨床学的に考えてみたい。ウルスラの関わりに、そのヒントが隠されている。

#### 4) ウルスラの関わり

ウルスラはキキと同じ声優(高山みなみ)が演じ、同じく親元を離れ、天与の才能を生かした職業に就き、時に挫折し、悩みを体験してきたなど、キキと響き合う点が多い。「ウルスラは成長したキキである」(田村, 2014)という理解も頷ける。

ウルスラは、落ち込むキキに対して、まずこう告げる。「あんたの顔いいよ、この前よりずっといい顔してる」。悩みの渦中にいたキキは驚いたことだろう。しかし、ウルスラの言葉は真を突いている。山岸(2021)が、

「確固たる自我を獲得するためのプロセスにあることを見抜いているが故の発言」と述べるように、今の悩み自体が成長であることを見通しているためだ。

確かに、以前の屈託がなく無邪気で、自信に溢れ、感情の赴くままやりたいことに一直線なありかた、キキの言葉を借りれば「素直で明るい」ありかたは眩しい。一方今のキキは、自信をなくし、内なる否定的な感情に戸惑い、「できていたこともできない」状態である。いわば「屈折して陰がある」ありかたである。しかし、そこには自らの限界を知った謙虚さと、他者への思いやりや優しさと、心の陰影がある。やはりウルスラの言葉は本質をついているのだ。それだけにキキは現状を肯定され支えられた思いがしただろう。

魔法の力が弱まって悩むキキに、ウルスラは次のように打ち明ける。同じ悩みを今も抱える同士として。

「魔法も絵も似てるんだね、私もよく描けなくなるよ」

自分だけが悩んでいると思っていたが、「憧れのウルスラもそうだ」と知って、キキは随分救われたことだろう。それに安心してか、キキはさらに悩みを打ち明けていく。

「私前は何も考えなくても飛べたの。でも今はどうやって飛べたのか分からなくなっちゃった」

やはりキキは飛ぶことは当たり前で、飛ぶことについて改めて考えたこともなかったのだ。それに対して、ウルスラはこう指南する。

「そういう時はジタバタするしかないよ、描いて描いて描きまくる」

「でもやっぱり飛べなかったら？」

「描くのをやめる、散歩したり景色を見たり…昼寝したり何もしない。そのうちに急に描きたくなくなるんだよ」

まずは努力、それは目的に向かって計画的に努力するというものではなく、「ジタバタ」我を忘れるような努力の必要性を伝えるのだ。ただ、それで埒が明かない時には遠心的な活動は止め、心的エネルギーを内側に向かわせることの大切さも示唆する。意識的な努力ではなく、心の自律的な働きが生じるように心身を整え、潮が満ちるように時が熟するのを待つ、そんな知恵の言葉を授けるのだ。さらにウルスラは続ける。

「私さあキキくらいの時に絵描きになろうって決めたの、絵描くの楽しくてさ、寝るのが惜しいくらいだったんだよ。それがね、ある日全然 描けなくなっちゃった、描いても描いても気に入らないの。それまでの絵が誰かのマネだって分かったんだよ、どこかで見たことがあるってね。自分の絵を描かなきゃって…」

「苦しかった？」

「それは今も同じ。でもね、その後 少し前より絵を描くって事わかったみたい」

ウルスラはこのように創造の苦しみを吐露する。ただ、それに対する直接的な解決法を伝えることはしない。しかし、そうした悩みは全く無意味なものではなく、その体験を経ることで絵を描くことに自覚的になれることを、そして真の創造性に近付けることを、そっと示唆するのだ。

山岸(2021)は「魔法とは何か、飛ぶとは何か、自分を構成する要素について考えたこともなく、当たり前のもんとして自分とともにあったそれが、自分から離れたとき、初めてその存在を認知し、考えることができるようになる」と述べている。つまり、魔法を失ったこと(不如意)は苦しい現実だが、それによってはじめて深く自覚的に魔法について考えることになったのだ。実際キキも次のように言う。

「あたし、魔法って何か考えたこともなかったの。修行なんて古くさいし

きたりだって思った。今日あなたが来てくれてとても嬉しかったの。あたし一人じゃ、ただ ジタバタしてただけだわ」

キキは、魔法について考えたことがないこと、いわば「無自覚だったことを自覚」したのだ。この気付きは、考え、自覚的に身に付けるありかたを準備すると思われる。そして感謝の思いを告げる。やはり、キキは1つ大人になったのだ。

このように、ウルスラは悩みながら才能を生かして生きる先輩として、キキの悩みに対して安易な解決策を伝えて、悩みを取り去ることはしない。逆に悩むことの大切さ、そして努力の大切さを言葉にしてそっと手渡す。また、悩みを乗り越えた「上から」の立場ではなく、いわば「同士」として今もなお苦しみがあることを吐露する。今後キキが悩むことがあっても、悩み自体に意味があることを知り、「悩むことに悩む」ことはなくなるだろう。また悩んでも孤独に陥るのではなく「ウルスラでも悩むのだ」という心強い支えを得たのではないか。

## 5) おばあさんの関わり

最後に、老婦人の関わりについて整理したい。一見、彼女は何もしていないように見えるかもしれない。しかし、キキは彼女のおかげで「他者」との関係の基盤を培えたのだ。

キキと彼女との関係に、両親とのような甘えはない。どんなにわがままをしても最終的には受け入れてもらえるような関係ではなく、その仕事で評価される関係である。社会では働く上では、契約を果たすことで信頼を得る必要がある。キキは老婦人をあくまでお客様、つまり「他者」として敬い、その意志や思いを汲んで懸命に遇した。

清水(2009)は「互いが分離し別々の存在であるという事実を改めて自覚することでこそ、個々の主体として人は出会い繋がれるのではないだろうか。すなわち『隔たり』とは、決してネガティブなことではなく、むしろ

人間関係における本質的な事態であり、その『隔たり』においてこそ『繋がり』の世界が開かれる可能性があるのではないかとする。キキはこの隔たりを悲観するのではなく、自覚した上で、しかしそれを架橋する努力を続けたと言える。

それでは、老婦人からケーキをもらってキキが涙したのはなぜだったろうか。もちろんケーキが嬉しかったということもあるかもしれない。しかし、それよりも魔法の力を失い存在意義を失いかけていた時に、「自分を認めてもらった嬉しさ」があったのではないか。そして、老婦人との関わりの中で「個」と「個」として関係性を持ち、働くことを介して社会に受け入れられる第一歩目を味わえた喜びも。これは、大人に下駄をはかせてもらった根拠のない自信ではなく、現実の裏付けのある確かな自信である。

以前のキキなら、「私チョコレートケーキなんて嫌いなよね」となっていたと思われる。キキは、他者の心配りに気付き、それを受けとめ、そして心からの感謝ができるようになったのだ。

## 7. おわりに—キキが届けたもの—

その後、物語はトンボの危機を救うという大団円を迎えるが、本論の目的から外れるので詳細は割愛する。

本論に関連する点だけを取り上げるなら、キキはトンボの危機で町中の人の声援を受け、トンボを助けて歓呼の声で迎えらる。この関係自体、故郷の街でいたときのように、無自覚的に関係性の中に溶け込むような質のものではない。あくまで自らつかみ取ったもので、「他者」同士でありながらつながりもある。

また魔法の力も取り戻した。ジジの力を借りず、母のホウキではなくデッキブラシで飛んだのだ。周囲のお膳立てではなく、キキの主体的努力によって。これは従来のように無自覚的に身に付いた能力ではない。「このときのキキの飛行能力はもう自分の中に生まれたときから存在する、身に

なじんだものではなく、「なっていない」のだ(内田, 2013)。裏を返せば苦労して自覚的に掴み取った能力として、意識の力でコントロールできるものとなったと考えられる。

思春期に入ると、外なる世界や内なる世界との無邪気で幸福な親密さから旅立たねばならない。キキは、周囲の支えを得て、世界の「不如意」との邂逅を経て、それを「現実だから仕方がない」と諦観するのではなく、「ジタバタと」あがきながら、子どもから大人の女性へと大きく変質していった。

キキは無事に送り届けたのだ。自らを大人の世界の玄関口に。

## 文 献

- 角野栄子 (1985) 魔女の宅急便. 福音館書店.
- 角野栄子・宮崎駿 (2001) ロマンアルバム魔女の宅急便. 徳間書店.
- 川勝麻里 (2014) 宮崎駿と角野栄子, 二つの『魔女の宅急便』. 埼玉学園大学紀要. 人間学部篇第14巻, 221-226.
- 北村一恵 (2018) 映画『魔女の宅急便』における飛べないシーンの意味について. 立命館映像学. 2018年度学生優秀論文.
- 熊本哲也 (2022) 宮崎駿作品における「飛行」「落下」「飛ぶ夢」のテーマ分析—『風立ちぬ』, 『魔女の宅急便』を中心に—. 岩手県立大学高等教育推進センター, 33-49.
- 宮崎駿 (1996) 出発点1979~1996. 徳間書店.
- 大塚英志 (2013) ストーリーメーカー. 星海社.
- 斎藤久美子 (1984) 優等生. 馬場謙一・福島章・小川捷之・山中康裕(編). 子どもの深層. 有斐閣.
- 清水亜紀子 (2009) 「不如意」を生きる主体に関する一試論. 京都大学心理臨床シリーズ第8巻. 創元社.
- 鈴木敏夫 (2013) 映画『魔女の宅急便』誕生. スタジオジブリ・文春文庫編. ジブリの教科書5. 文春ジブリ文庫.
- 武田京子 (2004) 少女から女性へ—キキの成長—. 岩手大学教育学部研究年報第64巻, 122-130.
- 田村奈保子 (2014) 教材としての映画:『魔女の宅急便』の精神分析的考察. 福

『魔女の宅急便』における支援のありかたに関する心理臨床学的探求の試み

島大学行政社会学会行政社会論集26(3), 37-53, 2014-02.

内田樹 (2013) 空を飛ぶ少女について. スタジオジブリ・文春文庫編 (2013).

ジブリの教科書 5. 文春ジブリ文庫.

山岸結衣 (2021) 『魔女の宅急便』から見る子どもの自立. 京都大学「教育心理学Ⅱ」期末レポート.

# Clinical Psychological Exploration of Support in *Kiki's Delivery Service*: From the perspective of encountering things going awry

KOYAMA, Tomoaki

## Abstract

Taking the animated film *Kiki's Delivery Service* (produced by Studio Ghibli, distributed by Toho), this study examines the mental growth of the 13-year-old witch-in-training Kiki and how she was supported by those around her from a clinical psychological perspective. This study interprets the changes in Kiki from the standpoint of encountering “things going awry.” The author hopes that this can serve as a guide to support the many adolescents who struggle in their lives.

In the city where she trains, Kiki feels down because of the numerous realities that do not go her way, which she never experienced in her home village, and is overcome by negative emotions inside her and finally even losing her magical ability. We can think of Kiki as living through “things going awry” in what may be called a “radicalized” form. Based on this, we consider how Kiki was supported by the people around her as she overcame this crisis.